ガラスの壁

木村洋輝

登場人物
哲也
里美
幸一

飛行機の中。
座席が三つ並んでいる。真ん中に、里美が座っている。
里美、呆気にとられた表情で、左横に座る哲也を眺める。

哲也　出発時刻って何分だっけ。

里美、瞬きを繰り返し、答えない。

哲也　何、見惚れた？
里美　よくそんなこと出来るなあって思って。尊敬するわ。
哲也　へえ、君も誰かを尊敬するんだな。
里美　嫌味だったんだけど。
哲也　俺のも嫌味だ。
里美　そもそも、なんでここにいるわけ。私、この便に乗ること言ってないよね。
哲也　さあ。愛のなせる業じゃないか。
里美　気持ち悪いんですけど。どうせ、私の友達からこっそり聞いたりしたんでしょ。濡れた猫みたいに哀れっぽく。そういうの、得意だったもんね。
哲也　情報収集力と言ってくれよ。楽じゃないんだよ、同情を引くのも。やりすぎると煙たがられるし。それに、俺だって時には、哀れな猫にもなる。
里美　どうでもいいから。で、私たちの邪魔しに来たのね。
哲也　挙式の？　まさか。そんなつもりはないけど。
里美　嘘。じゃなかったら、なんでハイジャックなんかしてるのよ。
哲也　俺はピストルを持ってるぞって叫んだだけだ。まだハイジャックじゃない。
里美　今からハイジャックしますよって宣言しているようなものじゃない。さっきからざわついてるの、君のせいなんだけど。
哲也　そういえば、君のフィアンセは？　トイレにしては長すぎるだろう。

里美　搭乗する直前に仕事の電話が入ったらしくて。ちょっと遅れるって。トイレにも行ってるのかもしれないけど、男子トイレの混み具合なんて知ったこっちゃないわよね。
哲也　君も変わったよな。
里美　は？
哲也　花も恥じらう清廉な女性だったのに。
里美　そりゃあ、恋人の前では誰だってそう振る舞うわよ。別に、性格とか人格が変わったわけじゃないわ。あの姿も、本当の私。
哲也　じゃあ、まだ俺たちが付き合ってた頃、君は本当に清廉な女性だったわけだ。俺に対しても、彼に対しても。
里美　まあ、そういうことになるわね。
哲也　ビックリしたよ。他の男と結婚するって話を聞いたとき。まさか、君が浮気してただなんて、考えもしなかった。
里美　仕方ないじゃない。好きな人が二人いたんだもの。
哲也　あの日も君はそう言ってたけど、俺は納得がいかないんだ。君が俺に清廉であったように、俺も君に誠実であろうとしていた。なのに、君は。
里美　終わったことを考えても不毛だと思わない？　今更婚約を破棄するわけにもいかないし。
哲也　俺も、そんなこと望んでない。ただ、君が式を挙げる前に、どうしても聞いておきたかったんだ。どうして俺じゃなくて、彼を選んだのか。
里美　出発前のハイジャックはそのため？
哲也　ああ。
里美　迷惑な話。でも、言っても君には分からないわ。
哲也　言わなきゃ分からないだろ。
里美　分からないわ。だから、君は私の苦悩にも、痛みにも気付かなかった。私も、説明する気にはなれないし。まあ、いつか笑い話になるかもしれないけど。話すとしたら、その時まではないわね。
哲也　そんなに俺は鈍いのか。
里美　さあね。そうかもしれないわね。

里美、席を立つ。

哲也　どこに。
里美　あの人を探しに行かないと。座席が分からなくて迷ってるのかも。

里美、移動しようとしない。

哲也　どうした？
里美　ただ、申し訳ないなとは思ってる。世間体からしてみれば、悪いのは私のほうなのに、君を傷つけてしまって。でも、私だって傷ついてた。
哲也　お互い、痛かったっていうことか。
里美　ええ。

里美の後姿を見送る哲也。虚空を見つめる。
幸一が登場。里美が座っていた座席の右隣の座席に座る。
幸一、身を隠すように体を折り曲げ、声を潜めて哲也に話しかける。

幸一　あの。すみません。
哲也　はい？
幸一　ハイジャック犯って、今どこにいるんですか。
哲也　え？　……ああ、ハイジャック犯。
幸一　なんか、そんな話が耳に入って。あの、ここの座席、僕の妻なんですけど、あれじゃないですよね。人質とかなってたりしませんよね。

幸一、里美の座席を指す。

哲也　出発前にハイジャックなんかするかなあ。ましてや、人質なんか。
幸一　ですよね、デマですよね。でも、出発時刻遅らせるらしいですし、それはそれで怖い、というか。妻もいませんし。いや、妻というか、挙式はこれからなんですけど。
哲也　よっぽど好きなんですね。

幸一、照れくさそうに首を揺らす。口角が上がっている。

幸一　ええ、恥ずかしながら。高嶺の花でしたけど、上品で、気さくで。笑った顔なんか、えくぼがかわいらしくて。僕なんか、釣り合わないと思うんですけど。
哲也　ぞっこんなんですね。
幸一　すみません、僕、初対面の方に何言ってんだろ。
哲也　俺にも、いました。そんな彼女。別れちゃったんですけどね。……お互いさまということで、俺も話していいですか。彼女のこと。
幸一　ええ、もちろん。何かの縁ですし。
哲也　大好きでした。その彼女のことが。それこそぞっこんで。この人のために、俺は誰よりも誠実になろうって決めていたんです。彼女を笑顔にさせて、幸せにできれば、俺は自分がいくら傷ついても構わない。本気でそう思ってました。

幸一　そんな彼氏さんを持って、彼女さんも幸せだったでしょうね。
哲也　でも、彼女、浮気していたんですよね。それを彼女の友人から聞いて。
幸一　ああ……、それで。
哲也　でも、俺は知らないふりをしたんです。知っていながら、彼女とその男の間に手を伸ばそうとしなかった。だって、浮気とはいえ、彼女の決めた相手ですから。俺は、ガラスの壁の向こう側に立って、彼女たちを見ているほかなかったんです。彼女から別れを告げられたのは、去年のクリスマスの夜でした。
幸一　どうして、怒らなかったのですか。
哲也　俺はただの恋人で、怒る権利なんてないと思ったんです。もしかしたら、彼女はその男と歩く方が幸せなのかもしれない。だったら、その幸せを見守ることこそが、誠実なあり方だと思ったんです。でも。
幸一　でも？
哲也　つい最近、彼女と再会したんですよ。彼女、苦しかったと言っていたんです。浮気からくる罪悪感か、とも思いましたけど、いまいちピンと来なくて。
幸一　――多分、ですけど。彼女さんは、ガラスの壁の向こうにあなたがいると分かっていたのではないでしょうか。
哲也　え？
幸一　浮気を知りながら、それを黙認しているあなたの姿が、彼女さんには見えていたのではないでしょうか。あくまで仮定の話ですけど、そう考えれば、彼女さんの苦しみが見えるような気がします。……すみません、失礼ですよね。
哲也　いえ。……彼女の秘密を知っている、という私の秘密を彼女は知っていた、ということですか。でも、そうであれば、打ち明けませんか。そんな窮屈な浮気、逆に辛いでしょう。
幸一　だから、辛かったんだと思います。でも、それ以上に、ガラスの壁が割られなかったのが、苦しかった。そういうことではないでしょうか。
哲也　――失礼を承知で、聞いてもいいですか。
幸一　なんでしょう。
哲也　あなたは今まで、奥さんの浮気を疑ったことはありますか。
幸一　まあ、男なら何度かはあるでしょう。不安にもなりますし、時には心細くなります。女々しい生き物ですからね。無理やり隠してますけど。……さすがに、妻に「他の人と結婚する」って言い出されたときは、度肝を抜かれましたけどね。

哲也、呆然とする。

哲也　どうしたんですか、それで。
幸一　そりゃ、怒りましたよ。いや、怒ったっていうよりも駄々をこねたって言った方が正しいかな。それくらい無様な姿をさらしていたと思います。ちょうど、今年の一月のことで

す。

哲也、席を立ち、退場する。自分が幸一のように怒ることができれば、ガラスの壁を破ることができたなら、里美は自分の隣に居続けてくれたのだろうか、と考えながら。

哲也の後姿を、不思議そうに眺める幸一。

里美が登場し、幸一は里美に視線を移す。

里美、幸一の左隣に座る。

里美　探したんだよ。

幸一　ごめんごめん、途中でトイレに寄ったりしててさ。

里美　ふうん。じゃあ、連絡してよね。不安になるから。

幸一　トイレ行くのに連絡かあ。

里美　だって、遅れたら大変でしょう。二人で行かないと意味ないものだし。

幸一　まあ、確かにね。でも、まだ動かないみたいだよ。ハイジャック犯がいるってデマが流れてるんだ。

里美　ああ、それなら心配ないよ。噂のハイジャック犯はいないから。

幸一　何で君が断言できるのさ。

幸一、首を伸ばし、スクリーンを見る。

幸一　もうじき出発するみたいだ。やっぱりハイジャック犯はいなかったんだね。

里美　それか、逃げ出したか。わからないけど。

幸一　まあ、どっちでもいいよ。いよいよ出発か、楽しみだな。

里美、虚空を見つめながら、

里美　そうね、楽しみ。

終わり